

# 検査結果の見方について

「基準範囲内の数値でも…」

私たちのクリニックでは検査結果を見るにあたって次のように考えています。特に血液検査については、個人の検査結果の横に基準値が記載されています。この枠内に入っていれば多くの方は”正常だから大丈夫”と考えます。それはそれで間違いではなく、健康な方のほとんどがこの基準値内に収まるという数値に違いはないからです。これは多くの健常者の方のデータの、いわゆる個人間変動を基に統計処理した(エビデンスベースト)基準値というものだからです。しかし特に人間ドックの経年変化を診る場合に、私達はこれに重要な数値の読み方を加えます。それは聞きなれない言葉ですが、個体内変動という考え方です。

例を挙げてみましょう。

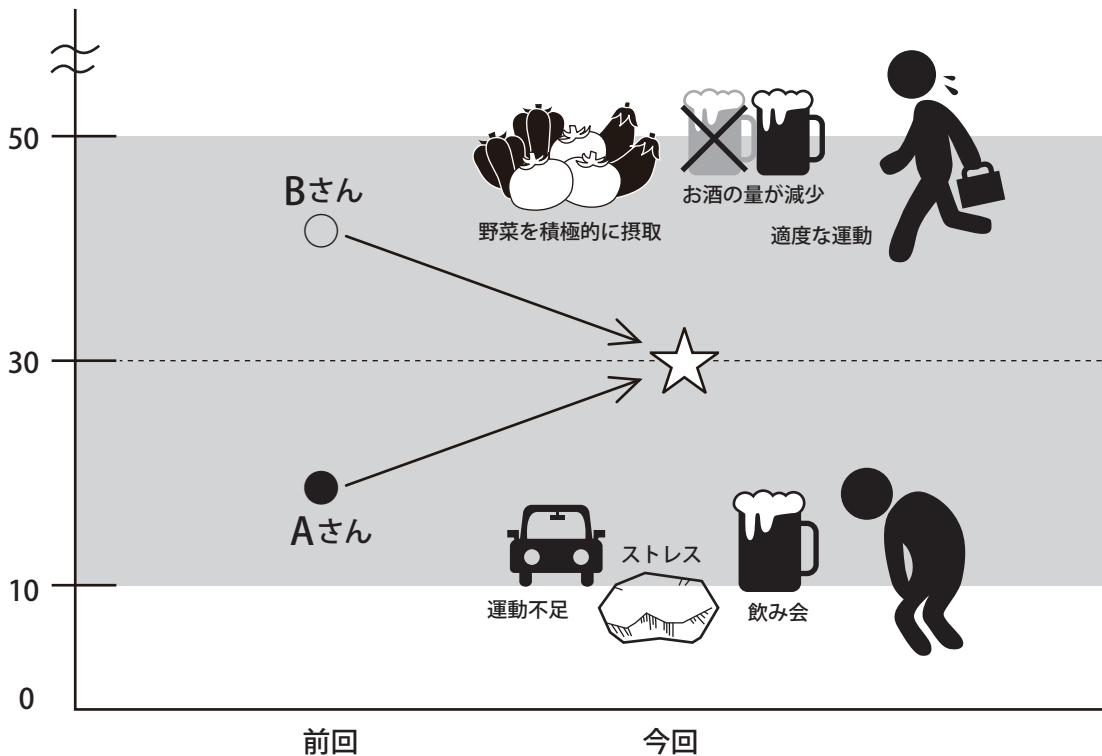
10～50が基準値の検査があるとしましょう。肝機能AST・ALTあたりを思い浮かべられるといいでしょう。Aさんは例年ほぼ20前後の値を示していました。基準値内低値で問題ありません。一方Bさんですがちょっと高めめの40とはいえ基準値内にいつも収まっていて問題無しとした経過でした。ところがある年の検査ではAさん、Bさん共に30という値になってしまいました。全く基準値の中央値だから問題ないじゃないか、そう思われるかもしれませんが、それはそれで正しいです。

さて、ここでAさんに問診してみます。

「郊外に家を購入し通勤に時間がかかるようになりました。会社では役職に付いてさらに帰宅が遅くなり夕食を食べて疲れ果ててすぐ寝ます。運動する時間が全くなくなりました。飲み会も増えメンタルなストレスを感じ始めています。」という返事が得られました。

一方Bさんは確かに血液検査以外に体重と腹囲が減少しています。聞いてみるとこうおっしゃいました。

「いつも先生が未病だと言われるので一念発起。街では階段利用を心掛けるようになり、通勤では一駅手前の駅から約15分歩いてます。10分も歩くと小汗を感じるんですよ。食事野菜を先に食べるようにしています。酒も控えました。1～2単位に抑えています。どうですか？頑張った成果が結果に出ていますか？」



いかがですか。お二人とも30という値ですが、20から30になった方と、40から30になった方、いずれも基準値内の中央値を示していますが、その裏の生活にいろいろな動きが潜んでいるのです。